

〔木曾路名所圖會^四〕須波の湖 周十一里餘、亘三里許、鯉、鮒、龜甲あり、今は水治りていにしへに及ぶるもの歟、玄冬の頃、湖面風ひゞらひでより氷鏡のごとし、略○中 此湖まどかにして深きところ七尋ばかりあり、めぐりに浦々ありて、民家衆し、四方には山々ありて、風色斜ならず、漁父あまた有て魚鱗をすなごる事多し、漁舟の外船に乗ことを禁ず、この湖冬の頃より春にいたり、氷はりて尺寸も透間なく、湖一面にふさがり、年の寒温によりて、霜月のうち、あるひは師走の初より氷はりて、後人其上を通る、略○中 日本國中に湖多しといへども、かくの如く氷はる所なし、信濃は日本にて地高くして、寒氣深き國なる故也、略○下

〔東遊記後編^三〕諏訪湖

信州諏訪の湖は、周廻三里の小湖なり、然れども亂山重疊の中にありて、景色は無雙の地なり、此湖邊より湖上に富士山の北面を見る、富士山峭直にして、寶永山を見ず、富士の形は、此湖上より見るも又奇なりと云、扱此湖に世俗にいふ七不思議といふ事あり、其中にも殊更奇妙の事とするは、此湖水冬に至れば、寒國の習ひとて、一面の氷となる、厚さ數尺に及び、金鐵の如くにして平地に異ならず、霜月より翌年の二月までは人馬皆氷の上を往來して、少しも恐る、事なく、下の諏訪上の諏訪、其間三里の所たるを、冬は、氷の上を一文字に通行する故、纔一里に成りて、甚便利なる事也、いかなる重き荷物を付たる馬車にても、むかしより氷破れて水底に落入りしためしなしとは、不思議なりと問ひしに、冬の初に神渡りといふ事あり、其神渡りありて後は、氷破る、ことなし、春に成り又神渡りあり、其後氷いまだ厚しといへども、恐れて一人も渡るものなし、其神渡りはいかなることぞといふに、冬のはじめ、一夜湖上大なる音して、物を引通る如し、夜明て見れば、氷の上を一文字に格別の大石大木などを引通りたる如く、氷左右にわれ分れて、一筋の道付たり、是は渡り濟みたりと云、此後は人馬往來して過ち無し、二月の末又此事あり、其後は渡